

セピア色の写真

三世代

信州から上京した邦子の母方の祖父谷岡健之介が、世田谷の松原町に家を建て、妻ふさと共に移り住んだのは、昭和九年の秋のことである。

郷里の上諏訪では、町役場の兵事係として羽振りがよかった筈の健之介だった。それが左隣の矢藤純一が町議に立候補したのに肩入れしすぎて、職を失った。そういった一本気の短慮が健之介らしい。子供のころは、朝新しい足袋を履かせて登校させても、貧しい裸足の子にやってしまい、帰りは自分が裸足でいる。何度親を嘆かせたことかは健之介の妹、春の話である。中学では友人を庇って、教師を殴り退学させられた。「義を見てせざるは」といった侠気は生来のものであった。後に死に至った病さえ他人の面倒を見て被ったものである。

健之介は、松本連隊近衛騎兵隊の曹長として日露戦争に参戦していた。二十三才のときである。旅順の鎮担保の合戦で、分隊長として奮戦し、多くの死者を出したものの、死守したという功勞で、乃木將軍の個人感状と勲六等の金鷄勲章を授与されていた。先頭切って敵弾に身を曝していたにもかかわらず、無傷だったという僥倖の主であった。それは何かの加護があることを頷かせる潔い雰囲気を持つ男だった。

健之介はこの時、すでに五十才を過ぎてはいたが、婿の淳圓の伝手があって日本橋の繊維物問屋の経理担当として颯爽と勤務し始めていた。その新しい職場でも人気があり、一目置かれていたことは、何枚かの社員旅行の写真などからも伺える。

仏教学者の淳圓は、当時大正大学大学院の研究生であり、梵典の南伝大蔵経、国訳一切経の翻訳に従事していた。そして昭和八年二月に、健之介の長女律子と結婚し、住職として継ぐべき福井市の伝統ある寺を出て、養子として谷岡家の人となっていた。

律子は日本女子大学校在学中から、当時勃興していた新仏教の運動に参加していた。卒業直後肋膜炎を患って、療養生活を送ったこともあり、婚期は遅れていた。健康になってからは、小石川にあった淑徳高等女学校の寄宿舎月影寮の寮監を勤めていた。その間大正大学の最初の女子聴講生として、二年ほど仏教概論や仏教史などを学んでいた。新仏教の運動に好意的であった梵学の世界的な学者、荻原雲来師がそんな律子に愛弟子淳圓との結婚話を勧めたのだった。

淳圓は相当熟慮したようであるが、結局生家の猛反対を押し切り、檀家との因習や束縛から開放されて、囑望されている学問に専心する道を選択した。律子の知的な魅力の勝利でもあった。淳圓二十七才、律子二十五才であった。そしてその年の秋深く、淳圓と律子の中に邦子が生まれた。

当時、淳圓一家は、健之介が笹塚にその十年ほど前に建てた、三部屋ほどの小さな家に住んでいた。門も庭もないその家は、二人の娘、律子と敏子が日本女子大学校へ通学するためのものであった。淳圓の梵典の

翻訳料のみで生活するのは、なかなか大変だったろうが、健之介夫妻の温かい支援と、何よりも若さと夢があった。笹塚の家の前で、溢れんばかりの笑みを湛えた淳圓に抱かれた、丸々した顔の邦子の小さい写真がある。

やがて松原町の新居の完成をまって、三世代はそこに同居したのだった。

邦子の弟周一は、翌年七月にその新居で生まれた。律子が、東京の暑さにやっと耐えているといった風情の浴衣姿で、縁側の藤製の長椅子に生後間もない赤ちゃんを抱えて座っている写真が残っている。

邦子が歩きはじめたのは、夏も終わりやっと涼しくなったころであった。二十二カ月を過ぎていて、片言のおしゃべりの方が先だった。律子は庭の芝生の上で、赤い塗りの下駄を邦子に履かせ赤い紐で結んで立たせた。とそれまで全然歩こうとしなかった邦子が、あぶなっかしい足付きでよちよち庭を歩き始めた。自分で

「あんよあんよ、おじょず」

と言いながら。

その年の秋、健之介の次女敏子夫妻が、大連に赴任することになった。婿の池島謙太郎は東大の建築科を卒業した新進の建築家で、大連に置かれた関東州（日露戦争後日本が租借権を得ていた地方）庁舎の設計を担当することになったのだった。

律子より一年早く結婚していた敏子は、すでに四人の子供の母であった。長女、次女と続いたあと、周一に僅か四日遅れての男の双生児を出産したのである。

赴任に先立って、新居の松原町の家で記念撮影をした。そのときの大騒ぎを満二才を迎えた邦子はかすかに記憶している。生後三カ月の双子をかかえての謙太郎一家には、お手伝いさんが二人いたが、彼女たちも並んで写っているし、隣家の健之介と同郷の老夫婦も前列に腰かけているという、賑やかな総勢十六人の記念写真である。

年下のお手伝いさんは、まだ十五、六才だったろうか、切り揃えた髪を耳の上でヘアピンで止めていたのが邦子には珍しく、それが邦子のその日の唯一のはっきりした記憶となった。

周一には、健之介にも淳圓にも、長男として格別の期待があった筈である。谷岡家の家系は男の子に恵まれないことが多く、一代おきに養子をとらねばならなかった。

初節句を前にして、健之介は妻のふさにも律子にも内緒で、婿を連れて日本橋に出掛けた。そして当時はまだ珍しかった緑の毛氈に五段の旗指物や鯉のぼり、兜の立派な五月飾りのセットを買い込んで来たのだ。物入り続きで頭の痛い思いをしていたであろう女どもを呆れさせたこの買い物は、後々の語り種となった。そしてその品々は、邦子の長男誕生するとき、律子が邦子にも一部もたらしたのだった。

しかし周一は、寸時もじっとしていない悪戯坊主となった。高価な陶

器や、新しいレコ - ドを割ったこともあった。後に新宿に日本有数の味噌問屋を築き上げた、律子の従弟功二は、当時は創業期で四谷に店舗を持ったばかりの働き者だったが、

「叔母の家に行くんだと一張羅の背広を着込んで行くとな、飛びついて来る周ちゃんに 目茶滅茶にされたもんだよ。あのゴタ息子が、今じゃ立派な学者なのだから分からない ものだ」

と述懐したほどだ。女の子しか育てたことのない健之介夫婦は、お仕置きと躰けに戸惑ったことだろう。周一には祖父母によって据えられたお灸の痕もある筈である。

昭和十二年正月、次女里子が生まれた。邦子は雨戸を閉めている律子を追って這って行く里子の後ろ姿を記憶している。雨戸を閉めたあとの仄暗い廊下にメリンスの着物の淡いピンクが遠い夢として臉に浮かぶ。

健之介やふさが里子を「おとなしい子だ」とか「手がかからない」と褒めるのを邦子は何度か耳にした。里子が、子供部屋に向かい合った食堂で、ちゃぶ台にもたれて一人で寝入っていたのを、邦子も発見したことがあった。そして漠然とそれは自分とは違うということなのだなと感じていた。

初産の折り、律子の骨盤が狭いからということで、邦子は日赤病院で一ヵ月早く鉗子で引き出された。他の患者を気づかって、夜泣きをさせまいと、ふさが赤子を一晩中おぶっていたことが癖となり、下では眠らなくなってしまった。ふさは、毎夜邦子を背負って炬燵にもたれて寝たのだそうである。そんな話を聞かされても、邦子はただ困惑を覚えるばかりだったのだが。

邦子や周一にはない、一才の誕生日の里子の写真館での記念写真がある。きょとんとした目が可愛いと邦子も思った。雛祭りには、律子や敏子の娘時代の七段の雛飾りに、博多人形の内裏雛が追加された。それは淳圓夫妻の懐で購われたものであった。

しかし、おとなしく愛らしい里子がちやほやされたのはその秋までのこととなった。昭和十三年の秋分の日には元気で大きな三女亮子が生まれたからである。

「一貫目もある」という言葉を邦子はその時覚えた。

「大きな子は楽だねえ。ごろごろ転がしても安心なもんだ。」

と感心したように言うふさの言葉にも、邦子は自分はきっと大変だったのだらうと思ったものである。しかし長女としての寵愛は絶対的であった。律子も他の子は「ちゃん」と呼んだが、邦子にだけは「邦子さん」と呼んでいた。周囲が邦子を何か大切な預かり物といった感じで接していた。

子供部屋

淳圓は西の端の応接間を兼ねた書斎が仕事場だった。南側に張出していて、大きな机も南面していた。左手にコイルのバネの付いたベッドがあった。仕事に疲れたときの仮眠用でもあったらうか。西側の壁面はガ

ラス戸の書棚になっていて、仏典の全集がずらりと並んでいた。玄関からの入り口近くには、ベージュの応接セットとキノコ型の丸テーブルも置かれていた。

机に向かっている父の背後に寝ころんで、邦子も本を開いては小半日も澄まして見入っていることもあった。そのせいか文字を覚えたのも早く、少女期の邦子の読書三昧の生活はここに萌芽したといっていよう。

しかし淳圓は、生来の子煩悩でもあったから、何かを聞きつけると、南側のドアをさっと開いて出て行くのが常であった。黄土色のギャバジンのかっちりした上っ張りを着て、体格も姿勢も立派で堂々としていた。

行儀見習いに一月ほど上京していたふさの姪が律子に、

「ねえさん、私も結婚するなら淳圓さんのような人になりたい」

と言っているのを邦子は聞いていた。

北側のドアは、トイレや玄関に通じていたが、南側は縁側に通じ、和室の客間、健之介夫妻の居間と並んでいた。

突き当たりは、淳圓家族の居間であった。子供部屋と呼ばれていたその部屋は東南の二面が開けていて、雑然としてはいるものの、温かさの感じられる部屋であった。しかし家の中央に位置していた健之介夫妻の部屋は、客間とは襖続きであったこともあって、冷やかにも整然と片付けられた部屋であった。

子供たちに昼食後のお昼寝をさせるのが、淳圓の日課であり楽しみでもあった。三十分ほど積木で五重の塔を作ったりして遊んだあとは、子供たちに横になって目を閉じるようにと言った。お腹の上にタオルを掛けたりもした。長く寝すぎたときなどは、

「三時のおやつだよ」

と起こしに来るのだった。振り子時計のエジプト数字の読み方や、おやつのお十時とお三時は長針と短針がどうなったときかと、両手を伸ばして説明をするのだった。

表彰状のような金縁の飾りのある用紙に、教育勅語が書かれたものを持ってきて、鉛筆で漢字に振り仮名を付けて、邦子に与えたのも淳圓だった。それは東郷元帥の書なのだと言った健之介は婿に小言をいっていたが、やがて邦子がすらすらと讀んだのを聞いて、それは免罪となった。周一もよく真似をして一緒にとなえた。

また淳圓は休憩のひとつを、自分の翻訳したジャータカ物語を邦子に読み聞かせた。邦子は書斎の机の横に置かれたスプリングの効いたベッドに寝そべっては聞いていた。

ある時、邦子はそのまま寝入ってしまったらしい。ふと気がつくと、健之介とふさが眠っている邦子の敷布団の両端を持って廊下をそっと移動しているところだった。邦子は子供心にその気遣いがうれしく、そのまま狸寝入りをきめこみ、運ばれて行ったのだった。

殆ど二十カ月ごとに生まれてきた三人の弟妹のために、邦子は母のもとよりは祖父母のもとで過ごすことが多く、夜も祖父母と川の字に寝る

のが常だった。

邦子が夜中に目覚めると、蚊帳の中のふさは、姿勢を正して合掌していることが何度かあった。両肘を直角に張って瞑想している姿には冒しがたい威厳があった。「神相観」というその瞑想は、乳癌の摘出をしたふさの命への祈りでもあったことだろう。健之介はというと、いつも行儀よく背を伸ばし上を向いて寝入っている。邦子もそのままそっと目を閉じるのだった。

ふさはよく、周一の寝つくまでを添い寝してやっていた。律子は下の子の世話で手一杯である。周一はふさの片方しかないしなびた乳房をまさぐっては安心して眠った。

ふさはよく童謡を歌ったり昔話をしてくれた。今は聞くこともない童謡もある。

「すずめ、すずめ、今日もまた
暗い道をただ一人
林の奥の竹藪の
さみしいお家に帰るのか

いいえ、みなさんあそこには
父さん母さん待っていて
楽しいお家があります
さよならみなさん、ちゅっちゅ

っちゅ」

またお風呂でふさは、抱いている子を揺りながら

「どんぶらこっこ、すっこっこ
あったまってあがれ
河原のドジョウが、小がにを生

んで

あずきか、まめか
すずらんか、すずらんか」

と歌っては、少しでも長く湯船に漬けておこうと努めるのだった。

五大昔話の「舌きり雀」「猿蟹合戦」「桃太郎」「花咲か爺」「かちかち山」は勿論、ふさのレパ - トリ - である。

「むかしむかしあるところに・・・」に始まる語り口を懐かしむのは、もう還暦を迎えている世代だけのものだろうか。

邦子は同じ話を何回もせがんだ。継子苛めの話には、穴のあいた袋を持たせられて、椎の実拾いに行かされたりと、いろいろと苛められていた姉が、通りかかった殿様が皿の上に塩を載せた盆を差し出して、歌を詠めというのに

「ぼんさらさら、さらの上にゆきふりて」

と歌ってご褒美を沢山もらい、お嫁さんにもなれたのに、うまく歌のつくれなかった妹は罰せられたという話もあった。

子坊主が和尚さんの留守に頂いた餡ころ餅を食べて、あんこを仏様の口に塗った。帰ってきた和尚さんに、子坊主はなにくわぬ顔で、餡ころ餅は仏様が食べたのだと言った。和尚が棒で仏様を叩くと「クワ-ン」と言ったので嘘がばれてしまった、というのもある。お寺の仏像を未だ見たことがない邦子は、仏壇の中の小さな仏像を想像していた。

冬は掘炬燵がしつらえられるのが子供部屋だけだったので、健之介もよく子供部屋の仲間になった。どてらを背中に掛けていたが、背筋はぴんと伸ばして姿勢がよかった。

「肩を叩いておくれ」

と言ったが、誰も満足するようには続かなかった。煙管を手放さず、気が向くと上を向いて、煙の輪をほっと吐いてみせた。子供たちは、

「もっと、もっと」

とせがんだ。

炬燵の上に手を出させて、手の甲を摘まみ、揺すりながら、

「お寺の梨の木、しゅんじゅが止まって

和尚さん、しいしに出たら

ちやくや、ぱっぱっぱ」

と歌って摘んでいた手をぱっと放すのも健之介に教わった。また健之介は一人の子が

「一番蜂」

と言って片手の拳を突き出すと、その甲を他の子が

「二番蜂」

と摘む。皆が「三番蜂」「四番蜂」と両手も使って交互に上に摘まんで行く。そして九番目に当たった者が、

「くまん蜂だぞ、ブ-ン」

と皆を追いかけてつねる遊びも伝授した。

「里や、じゃない邦や、じゃない周や」

と孫の名前を一通り呼んでしまうのが、子供たちにはおかしかった。

当時、色彩あざやかな講談社の絵本が発売されていて、どんなに当時の子供たちを喜ばせたことだろう。絵本の後部に、解説の物語の部分がついていて、ふさは背負った亮子をずり上げながら、せがまれる度に邦子と周一に繰り返し読むのだった。

特に、ふさは楠木正茂の絵本の後ろにあった桜井の駅での別れの部分にくると、いつも耐えきれずに泣きだして

「獅子は子を千尋の谷に落とす・・・」

と涙に咽びながら読むのだった。

後に邦子も孫に絵本を読んでやることもあったのだが、ふさのように同じ本を何回も読む根気は到底ないことに気が付いた。

よき時代のスナップ

あるとき、健之介が畳一畳ほどもある凧を買ってきた。赤い地に白い目を剥いた達磨が描かれていた。芝生の庭に持ち出して健之介が両手を広げてそれを立たせて持ち、淳圓に糸を引かせた。それは風に乗ってうまく上がり、みるみる小さくなった。

「手のひらほどになりましたよ」

と健之介は来客に自慢した。

来客といえば、信州から出て来た縁者や、知人がよく出入りしていた。ふさは上京して訪ねて来る人達の面倒をよくみて、慕われていたという。今の邦子にはそれがどういう関係の人なのか確かめる術もない。

邦子は、ふさや律子が楽しげに語り合っている人を帰すまいと、客が腰を上げると精一杯の声を張り上げて泣いた。よく来る客は飲み込んで、邦子に見つからないようこっそり帰るのだった。ほどなく邦子はそれは相手にとって迷惑なのだと気付くのだが、泣いて引き止めるのが礼儀のように思っていたのだ。誰も叱る人はいなかったのだから。

ある時健之介は、ふさの希望だったのだろうか、浅草に芝居を見に行くと行った。邦子も連れて行くから、周一に見つからないようにと言われて、廊下の白いカ-テンの影に隠れて、そっと抜け出した。

芝居のことは何も覚えていない。藤娘のような大勢の女が踊っている、照明と衣装の美しい舞台の映像が残っているばかりである。

芝居がはねてから食堂に入った。ふさの友達か親戚か大森に住んでいたおばあさんも一緒だった。四人は洋風の丸いテ-ブルの席をとった。親子丼とアイスクリ-ムが注文されたが、ふさはクリ-ムは食べられないと言った。邦子には親子丼は初めての体験だった。「この子はね、親子丼を一人前食べたんですよ」

と大事件のように健之介が会う人ごとに話した。実際は八分ほど食べるのがやっとだった筈である。

またある時は、健之介夫婦と淳圓夫婦が庭の砂場の前で相談を始めた。子供たちのために作られた直径一間ほどの円形の砂場には、梨の木の棚がほどよい木陰を落としていた。話題はその砂場を池にしようというものだった。結局はとりやめになったのだが、邦子は傍らで、そんな対話を興味を持って聞いていた。

ある時は、ふさと律子が口論していた。原因は「鳩」はなんと鳴くかということで、ふさは、

「ポッポッポ」

という歌があるんだから「ポッポッポ」に違いないと言う。律子は小学校の唱歌に

「・・・くうくく・・・」

というのがあった。「クウクウ」だと言う。結論はどうなったのか、他愛もない母と娘の対話の一コマに過ぎないのだが。

邦子とはといえば、ひとりで夢想することが好きであった。例えば電車

の中で、パナマ帽に白い背広、白い靴、銀縁眼鏡の紳士を見かける。邦子はこの人に二度と会うことはないことを知っていた。ということは、今は二度とないのだと幼いながら邦子は考えていた。この瞬間を覚えておこう、と邦子は意識的にじっと記憶するべく対象を見つめた。今でも邦子はそうしてじっと見つめたいいくつかの場面をありありと思い出すことが出来る。

邦子はまた、本当の静寂には、耳底で音が鳴っていることも発見した。誰もいない部屋に寝ころんでその音に耳を澄ませていた。それは、シュマンの耳に鳴っていた音と同じであることを、後になって映画で知ったが、もうその頃には聞こえることもなくなっていた。というより、精神的にも時間的にもそんなゆとりもなくなっていた。

食堂での正座はよくしびれが切れた。それがいつのまにか消えていることが、また不思議であった。最期のしびれはいつなのか、邦子は一生懸命集中してみるのだが、いつも何にかに気をとられてしまって、一度も確認できなかった。そしてこの次こそいつも残念に思うのだった。

昭和十二年の秋には、里子のおむつも取れてふさにも多少の時間が出来た。健之介は、「お前に旅順をみせてやろう。敏子の様子も見たいしな」

とふさに言った。夏には日中戦争が始まっていた。連戦連勝ということで夜は提灯行列に家族総出で参加するのだった。白と赤の西瓜模様の何百という提灯が、万歳万歳の声とともに、暗闇の中に揺れていた。

戦火はいつ収まるとも知れない。健之介は行ける間に、若い頃命を掛けた戦場を妻にも見せたいと思った。戦友への鎮魂の祈りも捧げたかった。

ふさも、外地で幼い大勢の子を抱えた敏子を案じていた。ふさにとってはおじいさん子でもあった律子よりも、下の敏子に愛着があったことだろう。子供の頃から長女の律子は顔だちも地味で、一重のきりっとした目をしていたが、敏子は目鼻立ちもふさに似て、瓜実顔にぱっちりした二重瞼が愛くるしい美少女であった。おしゃまで愛嬌もあり、人懐っこく誰にも好かれる性格であった。

この年は、敏子に五人目の娘も生まれたとのことで、ふさには愛娘の産後の様子も気がかりなことであった。

当時は大連までは神戸から三日間の船旅であった。今の海外旅行に比べてもなかなかの大旅行である。二人の旅がどのようなであったかは邦子は知らない。健之介は一人で北京まで足を延ばしていた。しかし、ひと時を敏子の孫たちと過ごしたことは、ふさには大満足だったろう。お土産の甘栗を割りながら、楽しげに外地のお土産の甘栗を割りながら、楽しげに外地の孫について話すのだった。邦子より一才年上の文子をふさは褒めた。

お風呂で、ふさは肩のくぼみを指して、

「文子はね、おばあちゃんの肩にはポケットがあるねって言ったんだよ」

と嬉しそうに邦子たちに言った。邦子もその表現がうまいなあと感心したものだ。そして何となくハイカラな異国情緒の街に憧れたものだった。

その後もふさは二回ほど大連を訪れている。文子の話では、時期は大抵秋に来て、布団を作ってくれていたとのことである。観光目的ではなく、敏子の手助けが目的であった。文子によると「しょっちゅう来ていた」と言うのだが、それほど慈しみの印象が深かったということだろう。

邦子は例の「どんぶらっこ、すっこっこ」の歌も歌い継がれていたことを、後になって引き揚げてきた小さい従妹が歌っているのを聞いて知った。

船中の片道三日間ずつは、ふさにとって、一人きりになれる貴重な時間でもあった。ふさは、

「本が読めて本当にうれしい」

と敏子にそっと語った。

望郷

諏訪には御柱祭という大きな祭がある。寅年と申年に行われる、全国の諏訪神社の総本山でもある諏訪大社のお祭りで、その年は早春から秋までこの地方は祭り一色となる。

諏訪大社には、上社、下社があり、それぞれが二社あって、都合四つの御社の四隅に大きな丸木の柱を建てるお祭りである。

諏訪郡は、上社区、下社区に二分されている。それぞれの区の柱は八本ずつ。どの柱を分担するかはその回ごとに変わるが、諏訪郡こぞっての行事である。

神事は冬のうちから行われ、早春の伐採、山出し、里引き、建て御柱とそれぞれ二、三日かけてのお祭りで、その勇壮さは小林秀雄に「これぞ祭りのなかの祭り」と言わしめたほどである。崖ともいえる坂を血気さかんな男を乗せたまま落とす「木落とし」は、死人も出る危険なものだが、ハイライトではあっても全てではない。日数も人出も地理的な範囲も実に大がかりな祭なのである。

諏訪大社のお祭りは五月半ばには完了するのだが、その後は各地の氏神さまから各々の屋敷神までそれぞれに、相応した柱を建てるのだから、その年は殆ど毎日どこかでお祭りをしていると言ってもよい。

故郷を離れている者も、戻ってお祭りに参加するのが習わしであり、その人たちに精一杯御馳走を振る舞うのも習わしであった。

昭和十三年は寅年で、大祭の年である。健之介には勤務があり、ふさが邦子と周一を連れて行くことになった。

邦子四才、周一はまだ二才十ヵ月である。しかし、ふさは、まだ一才

の里子と、身重な律子に、周一をおいて行く訳にはいかないと思ったのであろう。

むずかることは十分予測できる周一を連れてでも、出掛けたい望郷の思いが、ふさにはあったのだ。ふさには邦子の知ってる範囲でも兄や姉妹三人は健在であったし、それは仲良しの思いやりの深い兄弟であった。

新宿から上諏訪までは、当時は六時間かかった。トンネルに入る前の汽笛に、窓を閉めないと煙が一杯に立ち込めて、煤だらけになってしまう。登りの勾配がきついので、いくつかの駅の停車にはスイッチバックが必要であった。スイッチバックとは本線の脇に作られたプラットホームに出入りするために、一旦バックしなければならないことで、山国特有のものである。

退屈した周一がぐずるのをなだめすかせて故郷にたどり着いたふさは、次々と繰り広げられる祭を追って親戚を巡った。

どこでも最大級の歓待を受けた。ふさは邦子に教育勅語を諳んじさせて満足気だった。「この子は新聞も読めるんですよ」とも言った。当時の新聞はルビが付いていたのだ。

お祭の喧騒は邦子は好きになれなかった。周一は「お面を買って」と道に座り込んだ。ふさは口に入れるものは絶対に買っわなかったが、それ以外では孫に甘かった。

邦子には伊那の祭で、鬼の面を着けた男が這い寄ってきて、服の裾を掴まれそうになったときの、息も止まる思いは忘れられない。きっと都会風の洋服が目立ったのだろう。こうした時の邦子は泣かない。予防注射の時と同じように、気張って我慢するのだ。

農家の親戚に泊まった折りは、広い板の間にコの字に並んで座り、銘々が自分の箱膳で食べる風習が印象的であった。箱膳の蓋を開けると中にそれぞれの茶碗やお碗、箸が入っている。蓋を返してお盆としてそれらを並べ、箱の上に載せてお膳とするのだ。食後、お茶で全てをゆすいで、またもとに戻すのという、衛生面を別にすればなかなか合理的な仕組みだった。

邦子には随分周囲を困らせたであろう思い出がある。御柱を曳く列の前後には、長持ちや、大名行列などの出し物が続く。「お騎馬」と呼ばれる大名行列の殿様は、五、六才の男の子で、白くお化粧をして、陣笠を被り、藤色の着物に陣羽織、袴を着て馬上にある。その前を毛槍の奴さん達が型をとって、ゆっくりと進む。邦子は自分も馬上の稚児になりたいと思った。

「お騎馬に乗せて、お騎馬に乗せて」とせがんだ。ふさも困惑したのだろう。伊那の甥に、農耕馬に乗せてくれるよう頼んだ。邦子は、陣笠ならぬ菅笠を被って手綱をにぎり、野良着に手拭いを頬かむりした屈強の若者に馬を曳いてもらった。鞍からずり落ちそうになるのをこらえて、澄ました顔で朝日にそよぐ青田の道を行くのだった。

その若者も五年後には、娶ったばかりの若妻と幼子を残し、戦場で散

ってしまうのだ。半月ほどの旅は無事終わった。ふさは祭というよりも、久しぶりの身寄りとの会話に満足したであろし、孫たちも恙なく帰途についたのだった。

五人の孫を持つ年になって邦子は思う。邦子には、むずかる孫を連れて、何日もの旅に出るほどの面倒見が出来るだろうかと。いやそれ以前に、嫁さんたちが、子供たちを何日も手放して預けられるだろうか。そんな信頼を邦子は持たれてはいない。それに孫の我が儘な要求をなんとか適えてやろうとしたふさのような優しさも持ち合わせていない。

また現在のように周囲に危険が満ちている社会では、預ける方も預かる方も、気楽には実行できるものではない。近くの天神様や原っぱへ、幼い仲間同志で駆けて行き、夕暮れまでも遊び惚けた時代は、都会は勿論、田舎にもなくなっている。

学齢期まえのイベントと言えば、七五三の祝いであろう。谷岡家では、邦子が七才、周一が五才、里子が三才とまさに七五三であったたから一大事業であった。

何といてもメインは邦子の着物である。親戚の日本橋の染物屋の女将が、何回も出入りして柄をきめた。ふさが選んだのは、萌黄の地に大きな薬玉模様の大膽な構図に繊細な図柄の大変凝ったもので、邦子も大いに気に入った。長襦袢も牡丹色の地に黄、白のぼかしの縮緬と決められた。長襦袢はもう一枚、御所車柄の羽二重のものも作られた。

帯、筥迫、髪飾り、木履とひとつひとつ吟味して買い足された。

染め上がった布を断ち、仕立てるのはふさの仕事で、律子も一緒に針を運んだ。華やかな布を広げているのを遠くで眺めて、邦子はその日を待ちわびた。

当日は例のごとく写真屋を呼んで、庭で記念撮影である。周一は新調の茶と焦げ茶のチェックのスーツ、里子は邦子のよそゆきだった臙脂のワンピースのお下がりに白い襟を新しくしたものを着せられた。

それから明治神宮の参拝である。京王線の明大前からなので、明治神宮は近い。明治節には何度も連れていってもらった馴染みの場所だったが、何時もの裏参道からではなく、この日は表参道からのお参りだった。これは邦子には大変な苦痛となった。玉砂利道をポックリではなんとも歩きにくかったのである。トイレも大変なことだった。着物で何重も巻き上げられている上に、ご丁寧にも膝上までの長いズロースをはかされていた。

千歳飴は新宿中村屋のものと決められていた。中村屋の相馬愛蔵、黒光夫妻は淳圓を大層可愛がっていた。夫妻は未来の仏教界での淳圓の活躍を信じていたのだ。邦子の三才の正月に挨拶に行った折り、押し絵の大きな羽子板を下さったこともあった。

まだ暖簾の下がった瓦屋根の中村屋は、大繁盛で、大変な人だかりだった。黒光夫人への挨拶どころではなく、飴だけを買って帰途についたのだった。その紅白の飴は、一般のように棒状のものではなく、板状で、

それが邦子には物足りない思いだった。

邦子の学齡期が近づいた。世相は戦争に向かって慌ただしさを増して、幹部候補生だった淳圓にはいつ赤紙が来るか分からない状況となった。軍服に身を固め、指揮刀を腰に下げて演習にでかけることも多くなった。

「邦子にふるさとを持たせねば可哀相だ」と言いだしたのは健之介である。定年も二年後となり、そろそろ望郷の想いが頭をもたげて来た頃でもあった。

健之介とふさは邦子を連れて、信州諏訪に戻り、邦子を諏訪の高島小学校に入学させると言いだして結局そうすることに決まった。邦子は父母と別れることにもそんなに抵抗はなかった。

東京を去るに当たり、これだけは邦子に見せて置かねばと、健之介は一日を邦子を連れて都内を巡った。健之介の選んだ場所は、いかにも健之介らしい。一番目は皇居とその前の楠公の銅像。次が乃木將軍の家。最後が泉岳寺の四十七士の墓である。

よく晴れた日であった。健之介と邦子は、二重橋に最敬礼をして、楠木正茂の銅像の前に立った。前足を上げた駒の手綱を取っている甲冑姿の銅像は、齒磨き粉の宣伝に使われていて馴染みのものだったが、実物は青錆びて艶がなかった。しっぽの毛の影に雀が巣を作っていて、囀りながら飛んでいた。

ふさが涙して読んでくれた本は、すでに邦子は一人で読んでいた。近々と見上げて邦子は満足だった。この像は戦後、広瀬中佐の像などともとり壊されて、今は記憶する人も少なくなったことだろう。

乃木將軍の家は現在もそのままなのだろうか。ステッセル將軍から贈られた白馬の厩があり、洋館の屋敷の周囲は手すりでも囲まれて、自決した部屋も見ることが出来た。

健之介には、命を途して戦った戦争の司令官であり、感状をもって報いてくれた人の家である。そこでは殆ど口を開かなかった。

邦子にとっては、ただ

「旅順開城約なりて・・・」

と歌っていた將軍の家である。殉死して天皇のあとを追う明治の士の心中など理解できる訳もない。ただその場の悲壮な雰囲気、ただならぬ気配は感じられたのだった。

泉岳寺は大変な人出であった。二人は近くの蕎麦屋で遅い昼食を取ったのだが、満員であわただしいものだった。

律子は、幼児向きの絵本には満足しなくなった邦子のために、知人の娘の読み古しの少女倶楽部やその付録を沢山もらって来てくれていた。その中に講談本めいた赤穂浪士の物語があった。それはすでに邦子の愛読書になっていて、堀部安兵衛、武林唯七、神崎与五郎などの名前はすっかりお馴染みだったのだ。

邦子には、義士の心意気などより、線香の煙のたちこめる中を、ただ

知っている名前の墓を見つけることに夢中だった。そして石に刻まれた名前を確認しただけで、すっかり満足したのだった。

戦争の足音

邦子は長野県上諏訪町の城南小学校に入学した。市制には翌年だった。学区としては高島小学校だったが、城南小学校は開校したばかりで、とりあえず全町の一、二年生が新校舎に通うことになったのだった。

邦子は田舎の子に囲まれても、全然気にしなかった。ただあるとき、下駄箱に大勢の男の子たちが集まって、

「ゲイシャの下駄だ、ゲイシャの下駄だ」

と騒いでいたことがあった。見ると邦子のつっかけのサンダルが騒ぎの原因だった。

「東京っぺ」と言われてもさほど気にもとめなかったし、同級生にはなんとなく一目置かれていて、特に意地悪をされたこともなかった。

ともかく邦子にとって、初めての集団生活は新鮮な発見の連続だった。東西南北を教室のそれぞれの面の柱に片仮名で書いた紙が貼られていた。邦子はその時方角を初めて覚えた。その後も方角を言うとき、一度教室を思い浮かべて判断する癖が何年も残った。

邦子には、父母弟妹と別れての生活が潜在的には淋しかったのか、夜尿症になった。ふさは毎夜邦子が粗相をしないようにと起こすのだった。又よく熱を出した。入学前の百日咳も長く尾を引いていた。

六月の終わり頃、担任の若い女教師が見舞いに来た。熱で真っ赤な顔をしているのに、枕もとに例の赤穂浪士の本があった。

「えっ、こんな本を読んで居るんですか。一年生には早すぎます。熱もそのせいもあるんじゃないでしょうか。」

善良なふさは、その後は邦子から本を取り上げた。それからの邦子は隠れて読むのに苦労することになる。押入れにもぐって襖を少し開けて読む。隠居家の二階に潜む。ついに根負けしたふさは、眼を悪くしてもいけないからと、全面解禁してくれたのだった。

秋になっても、体調の悪い日が続いた。ある夜、ふさは邦子を連れて行者の祈祷師を訪れたことがあった。不動尊の軸の前で、行者姿の壮年の男が一生懸命祈ってくれた。今思うと、ふさ自身も自分の体の異常に気づいていたのかもしれない。

そんな中、初めての遠足があった。諏訪湖に流れ入る六斗川のほとりの「白狐稲荷」までであった。ふさの古い足袋に草鞋を初めて履かされた。子腰を屈めて丁寧に藁の紐を結んでくれたふさのほっそりした肩と地味な色の着物を、当時のふさより五才も年上になってしまった邦子は懐かしく思い出す。

始めは、邦子のために、おじいちゃん、おばあちゃんが田舎に帰ると

いうことだったのだが、淳圓の出征が、ほぼ確定的な時代となり、その場合を考えた結果、淳圓以外の全員も諏訪に戻る、ということになった。いわば疎開のはしりとも言えたのだが、当時はよもや東京が火の海になるなどとはだれも予測してはいなかった。

松原町の家は、仲立ちの人がいて、二見陸軍少将に貸すことに決まった。淳圓はまたもとの笹塚の家に、必要な書物とともに移り、単身の研究生生活に入ることとなった。

昭和十六年三月、律子と下の子供達は上諏訪に引っ越した。淳圓も同行して来たが、疲労が重なっていた為だろうか、俄に肺炎を患った。律子やふさの懸命の看病で、幸い一命は取り留めた。邦子は湯気のたちこめる部屋に、氷嚢や布団を吊って昏睡している淳圓を覗き見た。それが危険な状態にあったことは、誰も口にしなかったが、気配で伝わって来るのだった。

やがて山国にも春が来て、十分回復した淳圓は東京に一人で戻ったのだった。

律子は、要請があって、長野県農業会情報部に勤務することになった。県庁のある長野市までは相当の距離がある。いわゆる通勤圏ではなかったから、週末以外は子供たちを祖父母に託しての下宿生活だった。「きぬさ」と呼ばれたお手伝いさんも雇った。

「お母さんは、学校の先生よりも偉いんだよ」

と健之介が邦子に耳うちしたのは、折角同居したばかりなのに、袴を着けて出て行く律子をつまらなそうな顔で見送っていたのだろうか。

天長節（四月二十九日）の夜、洗髪した時に耳に水が入ったか、邦子は夜中に耳が痛みだした。中耳炎だという。それがなかなか癒らない。通学の道すがら、何日も管で膿を吸い取ってもらった。耳の後ろの窪みが痛むなら手術が必要だという医者言葉に、邦子は「痛くない」と嘘をいった。待合室で、鑿で骨を割ると話しているのを立ち聞きして、それは絶対いやだと思ったからだった。

結局それが原因で扁桃腺炎になり、腎臓炎となって夏休みまで登校出来なくなった。

高熱にうかされた邦子がふと気がつく、座敷に寝かされ、覗き込む大勢に取り囲まれていた。近所の新興宗教の信者が両手をかざしてぶつぶつ言いながら祈っている。皆真剣な顔であった。病はそれ以後落ちてきてきたのだろう。その体験はそれで終わった。

夏休みになった。律子は子供たちを連れて上京した。邦子は一人で、笹塚から明大前まで、小さいときよく連れて行かれた太田先生という初老の医術の先生まで通った。仰向けに寝た体の上にじっと手を乗せて下さる。何療法と言うのだろうか。秋口から登校出来たのだから効能はあったことだろう。

ある日、笹塚の家の二階で、淳圓は近所の大工さんやおかみさん達を大勢呼んで、家族と一緒にお茶を飲んだ。餡パンが皿に盛られていた。邦子は餡が好きではない。二つに割って餡を少しつまんで食べたが、

「いらぬ」と父に渡した。淳圓は話に気をとられていたのか、それを手にして、

「おや、一寸見て下さい。この頃は餡もこれしか入っていないんですよ。だんだん厭な世の中になりますね」と言った。淳圓がそんな誤解をするのが不思議でないような、物資の欠乏を予測させる世相となっていた。

旧盆も過ぎる頃から、ふさは伏せる日が多くなった。晩年のふさは、「生長の家」の創始者谷口雅春に傾倒していた。邦子が枕元で「甘露の法雨」という経文を読むと大層喜んだ。邦子はそれが嬉しくて、毎日大声で読み上げた。

反対に玄關の板の間で、ゴム毬をつくことを頭に響くと嫌がった。昔の武家屋敷の田の字造りの家で、奥座敷までは離れている筈であるが。一度は毬を取り上げられた。

「これからは土間でしかつきません」と邦子は珍らしく殊勝に約束して返してもらったのだった。

九月に入って淳圓に召集令状が来た。真珠湾攻撃の三カ月前のことである。谷岡一家は筋向かいの写真館で記念写真を撮る。健之介は背広の胸に金鷄勲章を着けた。ふさもやつれてはいたが、身繕いをし、紋付きの羽織を纏った。そして軍服に身を固め軍刀を小脇に携えた淳圓を中心に勢揃いしたのだった。

健之介とふさはそのあと一人ずつの写真を撮った。そのときの写真はそれぞれ大きく伸ばされて額に入れられ、健之介の両親の肖像画に並んで仏間に飾られてある。

九月十日の夜、闇に紛れるようにひっそりと淳圓は出征した。開戦前のこととて機密裡

に行わなければならなかったのだった。

十二月八日朝、真珠湾攻撃の大本営発表があった。ラジオを聞いて律子は真剣な顔で

「大変なことになったのよ。銃後の私たちがしっかりしなければ」と子供達に言った。健之介は

「日本が負けるなんてことはないよ。日本は神国なのだよ」と至って楽観的であった。いずれにしる子供達は、ゴム毬も板チョコも手に入りにくい時代となったことを感じてはいたものの、戦争は遠い国のことに思えた。

ふさの容体は、滑り落ちるように悪くなる一方だった。そして十二月二十五日午後、大勢の人々に見守られながら静かに息を引き取った。満五十八才であった。邦子は言われるままに、ガゼでその口を湿らせたが、見開いた眼は邦子に向けられていたと信じた。

翌日の出棺まで、もし棺の中で眼を覚ましていたらどうしようと、邦子

は本気になって心配した。しかし灰となって骨壺に収め家に戻ると、初めてもう絶対に帰らぬ人となったことを実感するのだった。

翌日、中国で淳圓が負傷したという知らせが入った。迫撃砲の破片が背後を抉ったとのことである。鉄兜を背にしていたことが生死を分けた。ふさの死の前日のことであった。皆は、ふさの魂魄がすでに淳圓を護ったのだと言い合った。

葬儀は、正月間際のためか、淳圓の帰還を待っていたのか延期され、お骨は床の間に祭壇を設けて置かれた。そして翌昭和十七年の四月三日、亡くなった日より百日目に盛大に行われたのだった。

台所は調理師が二人雇われ、白いエプロンの近所のおばさん連中を仕切っていた。地方新聞の記者も呼ばれた。邦子、里子、亮子の三人とも振り袖を着せられた。帯は黒を締めた。奥座敷の中央に小さく健之介、律子と子供たちがいて、大勢の人が表座敷まで一杯に詰めている記念写真もある。

家から丘の中腹にある菩提寺までの葬送の長い列を邦子は学校で図画に描いた。

淳圓の弟の牧男が福井から参列した。淳圓と顔だちも体格もよく似ていた。邦子は

「お父ちゃんが戦地から帰って来たよ」

と来客に言って担ごうとしたほどだった。その牧男も、二年後にはインパールの露と消えて、一片の遺骨さえ戻らないこととなるのだ。

ふさの戒め

ふさは明治十六年上伊那郡の豪農の家に生まれた。聡明で小学校卒業のときは生徒代表として免状を受けた。飛び級を二回したという話もある。ご褒美に学用品を何度も貰ったと言う話を敏子が子供たちに語った。

上諏訪で、維新後に鯉節問屋を開店して、成功していた谷岡家に嫁いだのは、十八才頃であろうか。当時はせいぜい隣村くらいが婚姻の範囲であったから、郡を越えての結婚は珍しく、囑望されてのことであろうか。

当時谷岡屋の店には、住み込みの番頭と小僧が二人いた。その上に健之介の妹二人の小姑がいて、上の妹の婿も同居しているという大所帯であった。当時の常として嫁のふさは女中代わりのように働き、また使われたのだった。

夏の諏訪は、大陸性の気候で炎暑となる。その中を荷倉から鯉の生節を持ち出し干し上げ、黴を拭き艶を出してまた荷倉にしまう、という作業は大変な労働であった。

やがて日露戦争が始まり、健之介は松本連隊近衛騎兵隊員として旅順に出征する。ふさはすらりとしていたが上背はあった。丸髻を結うと一段と高くなる。健之介が駅で集合していると

「やあ、大きな内儀さんが来る」

と仲間が言うので、見るとそれはふさだったという話を、健之介は可笑しそうに淳圓に話したことがあった。

健之介の留守の間に、舅の健吉が病に倒れた。心優しいふさは胸を痛め、深夜氏神様の手長神社にお百度参りを続けた。

手長神社は、出雲の八岐大蛇に泣いていたお婆さんを祀ってある。国譲りで破れた曾孫の建御名方命を追って、爺さん、婆さんが出雲から諏訪までやって来た。爺さんは足長神社に祀られて諏訪上社の近くにある。

手長神社の境内は二百段ほどの石段を登らねばならない。夜その石段を登って行くだけでも勇気がいる。ふさは一途に舅の回復を祈った。その満願の夜、物凄い雷鳴をふさは聞いたという。舅の病はそれを機に癒えたのだと律子は子供達に語った。

日露戦争の戦勝祝賀に沸く中を、健之介が生還した。ふさの喜ぶ間もなく、金鷄勲章と感状を授与された男前の健之介は、もてはやされて、一躍花柳界の寵児となったのだ。夜每家を空ける健之介にふさは涙に暮れる日が続くようになる。

そんな中、律子が生まれた。赤子を抱いたふさはやっと炬燵の一辺に座ることを許されたのだった。冬の諏訪は寒い。囲炉裏のない町の家では、炬燵が何よりの暖房である。それまでのふさは、半畳の正方形の切炬燵の角から、やっと足先を入れることが出来ただけであった。

翌年には、敏子が生まれた。ふさは、敏子を背負って、家事と店の両方を寸暇も惜しんで働いた。律子は、奥の隠居にいた祖父母のもとで過ごした。

そんな苦勞しての売上も、料亭に集金に行くと、夫の遊び代を差し引かれてしまう。

「鯉節に猫は仕方がない」
とふさは娘達に嘆いた。

ある時ふさは、二人の娘を連れて里帰りをした。辰野駅で中央線から飯田線に乗り換える。ホームに降り立つと羽織袴の大勢の男が、幟を立てて迎えに出ている。見ると生まれた村の人達である。幟にはふさの同級生の名前が大書されていた。村の人の話では、彼は東京で大成功を収め、学校にピアノを寄付するなど、村のために貢献しているとのことであった。

ふさは、小学校時代勉強では彼に負けたことはなかった。しかし今は、ただ高麗鼠のように働き詰めの上、夫の夜遊びに悩まれ、くたびれ果てているばかりである。男と女では十年でこんなにも差がつくものだろうかと思ふさは思った。女ももっと自立出来るようにしなければ、この二人の娘も自分のような苦勞をすることだろう。そのためには、男にも負けない教育をこの子たちには受けさせようとふさは決意したのだった。

ふさの精神的な悩みを救ったのは、仏教であった。光明会の山崎弁栄上人のお説教は、自分のためのものと感じるのだった。念仏三昧の行事に参加するようになり、娘たちも影響を受けた。律子が仏教の勉強を選んだ理由もそこにあった。根が善良な健之介は、女たちの信心には協力的であっ

た。

律子は初めは医学を学ぶつもりだったが、折しも関東大震災が起こった。混乱と貧しさを伝える報道に心を痛めたふさは、孤児二人を引き取ろうとして、その着物にと紺緋の反物を買って娘たちを驚かせた。幸い信州までは申込みがなかったのか沙汰止みになった。しかしこのことが律子の目を貧しい人々のいる社会へと向けることになって、日本女子大学の社会事業部を選択するきっかけとなった。

当時は、信州から東京の女子大まで出すことは稀なことだった。女学校でさえエリート時代である。律子は母に心から感謝した。

ずっと後になって、諏訪の女性のパイオニアとも目された律子は、孫娘から「おばあちゃんの伝記」を夏休みの宿題として書くから思い出を話すように頼まれたとき

「おばあちゃん、東京の大学に行かせてもらえて本当にうれしかった。合格通知がきたときお母さんに『卒業したら、うんと親孝行するからね』といったらね、『あなたに学問をさせるのはそんな為ではありません。世の中のお役に立つ人になって欲しいからなのです。それを忘れてはいけませんよ』ときつく叱られたのよ。そのことは何かあるとすぐ思い出して、おばあちゃんはお母さんの言いつけに背いていないかと反省しながら

ら生きてきたんですよ」と語った。

邦子は、従妹にふさの思い出を尋ねた。邦子より四ヵ月遅れて生まれた玲子は、姉の文子ほどは祖母の記憶はなかった。しかし母の敏子がふさの教えとして伝えたことのいくつかを、邦子に語った。

「右手のことは左手に話すな」

「人の悪口は絶対言うな」

ふさは、隠れて慈善の施しを行っていた。店の者にさえ気づかれぬよう、夜敏子に提灯を持たせ、布団を背負って貧しい人の家まで運んだ思い出を敏子は持っていた。そうした善行は、右手に握りしめて口外するのではないということである。又他人の悪口も言っただけ自分が傷つき、自分に返ってくる。絶対に言ってはならないと戒めた。時折、近所のお年寄りを集めてお菓子を振る舞ったが、茶飲み話に出る人の噂のあれこれも、ふさはにこにこ聞いているだけだったと敏子は言う。これらの戒めを、敏子は子供達に伝え、自分も生涯守り続けたのだった。

明治の終わり

健之介は隠居に移り、隠居の前にも川水を引いて池を作り、鯉を放った。母家には泉水があり、枝振りのよい松が池に影を落として、鯉や緋鮒が群れをなしていた。その奥に隠居があった。築山を中心に表と裏に池がある

ことになった。縁先で菊造りもはじめた。

庭木の手入れの他に、アルバムの整理に日中を費やすことも多くなった。コ・ナ・の貼り紙をきちんと付けて、黒い台紙に注を白い墨字で几帳面に書いた。

ふさの戒名にならって、自分の戒名も作った。「顕功」という語を入れた。律子の生涯の師と仰ぐ、芝増上寺管長の椎尾弁匡師に墓碑の字を書いてもらって、谷岡家の墓碑と連銘碑を父母の墓の横に建て、朱の入った戒名も彫りつけた。

そうした空虚を紛らす日々の何よりの楽しみは、孫の周一の自慢話となった。そして一年生になった周一の勉強の面倒をいそいそと見るのであった。

朝早く温泉に朝湯に行くのは、上諏訪辺の老人の習慣である。帰るとすぐに周一を前に座らせる。ノートを開かせ、宿題の一字一字を点検して、歪んだ字があるときれいに消して書き直させた。算数も間違えた問題があれば何回もやらせた。おかげで周一は、二年生の終わりまで学校のテストは全て満点で、一つの間違いもなかった。

孫とじかに向き合うようになってからの健之介は、結構口うるさくなった。返事をしたらすぐ来なければ叱られたし、散らかすことが仕事のようなチビさん達に、きちんと片付けるよう小言を言った。律子と口論をして、気色ばんで

「腹をこっぴどく見せる」

と言ったときは、邦子はいつも健之介が鉛筆を削ってくれるピカピカの小刀を何処かに隠さなくてはと真剣に思ったほどの剣幕だった。

夏休み、笹塚の家の掃除の為もあって、律子は子供たちと上京した。お米は東京では外米しか手に入らなかったのか、不味く、暑さもあって子供達は食欲がなかった。律子は外米をトマトケチャップでごまかしたが、子供達はケチャップの味を初めて知って、大好きになった。

律子は、ふさの死後は農業会の勤務は罷めたのだったが、機関誌「信濃路」に寄稿していて、その原稿を邦子は盗み読みをしたのも東京でのことだった。感謝の精神に貫かれていて、やはり母は偉いんだなあと思密かに思った。

一日、律子は子供達を京王閣遊園地に連れていった。戦前淳園がよく邦子と周一を連れて遊ばせていた所である。当時は子供向きの施設がいろいろあった。

大きな赤鬼が立っていて、専用のボールを胸に当てると目が電気で赤く光り、金棒を持った手をぐっと上げて「ウオッ」と咆哮する仕掛けは、子供たちのお気に入りだった。丁度その時は園内の小さな映画館で「孫悟空」のアニメをやっていた。映画は下の里子、亮子には初体験であった。

帰郷して、この小さな孫たちは健之介に、

「おじいちゃんも牛魔王だ」

と口々に言った。これには健之介も参ったことだろう。

昭和十九年春、三軒先に疎開してきていた老海軍大佐が亡くなった。身

寄りのない疎開先でのこととて、健之介は先頭に立って面倒を見た。無事葬儀も終わって甘酒を御馳走になった。鈍い銀色に光っていたという。健康への過信が命取りになった。その晩から激しい食中毒の症状に襲われた。

下痢、嘔吐、発熱が続いた。近所の人達が次々と見舞いに駆けつけた。

四、五日して症状が収まっても、起き上がることが出来なかった。

病名はわからなかったが、むくみもきていた。痔も脱肛するようになった。住み込みの保健婦さんを雇って、律子も看病に明け暮れた。邦子も夜掛かりつけの医院まで、何度も薬を取りに行かされた。夜道の街灯は邦子の影を写す。歩くに従ってその影は前後する。長さも変わる。邦子は自分の変化する影に怯えながら、人気のない夜道を一目散に駆けるのだった。

山国の遅い夏休みが始まって間もない、七月二十九日の午後、三ヵ月ほど病んだ健之介はついに世を去った。

妹の夏と春が取りすがって号泣した。満六十二才、ふさが逝って満三年も経っていなかった。上原謙にも似た、小泉純一郎のような気っぶの人気者だった健之介は、足早に散々泣かせたふさのもとへと旅立ったのだった。

律子は、夫の出征中に二度の葬儀を出すことになった。母の葬儀には中心になって働いた父健之介の死である。ただ一人の妹は遠く大連である。そんな律子をしっかり支えてくれたのは、ふさの遺徳に与かった近親や、近所の人々であった。

健之介は、戦況が思わしくなくなっても、日本の戦勝を疑わなかった。敗戦を知らずに逝ったことは幸せだったかもしれないと律子は思った。

その後に起こった様々な事件によって、健之介やふさの嘗々と築き上げてきたものは、墓碑と古いアルバムを除いて、殆ど全てが消え去った。敗戦後の日本に起こったことの一つの象徴かもしれない。

先ず翌年、敗戦の僅か一ヵ月前に、屋敷が市役所の隣だったことから、強制疎開ということで壊された。爆撃の類焼から役場を守るためということだった。

辛うじて残ったのは土蔵、荷倉、味噌蔵と隠居の一部であった。

復員して来た淳圓は、生活のために、かつて健之介の勤務していた店の商品を、農協や小売店に卸す商売を始めた。残された隠居家を街道沿いに曳き出して、店構えを建て増した。しかし当初の混乱期は、何でも売れ繁盛したのだが、経済が安定して来ると素人にはとても無理なこととなった。やがて失敗し、骨董や什器の類は全て人手に渡った。

長男の周一は、東大から大学院に進み、大学教授の道を選んだため、淳圓は里子に婿養子を迎え、再建のメドの立ち始めた諏訪の店を継がせた。

淳圓の梵学への復帰は、ついに叶わなかった。しかし、仏道を通じて戦争の犠牲者を敵味方なく供養し、再び悲惨な戦争を起こすことのないよう、平和を祈る運動を畢生の仕事として始めたのだった。戦争で受けた心の傷は、二度目の戦傷の脚部の貫通銃創の痛みとともに、終生癒えることはなかった。

邦子も既に結婚し、五児の母となって、東京でのサラリマン家庭のや

りくりに没頭する年月が続いていた。

一度倒産した店も、里子夫婦のその後の努力もあって、一度は再生したかに見えたのだが、結局はその婿も事業家ではなかった。三児の母となった里子は、癌を患って四十八才で父母より先に亡くなった。里子が癌と闘っている間、その婿が商売上作った借金が、いつの間にか嵩んでいて身動きがとれなくなっていた。里子の死後、その借金を全て返済し店を畳むこととして、淳圓はそのために屋敷の敷地の半分を売った。

江戸時代に大火を免れた唯一の建物だった土蔵、ふさが鯉節の出し入れの労働に苦勞した荷倉も全て壊され、そこに淳圓夫妻の住まいを作ったのだった。昭和六十二年のことであった。

十年が経過した。今は淳圓夫妻も亡く、残された古いアルバムのセピア色の写真が、谷岡家の百年を物語っている。しかし、その主人公、健之介夫妻を知る人も僅かとなった。戦後は病気がちだった、敏子の夫謙太郎は卒寿を越え、敏子ともども息災である。そして邦子に、敬愛するふさのことを書き留めてほしいと語るのだった。

邦子は夫が定年を迎え、夫の故郷、鹿児島で、姑と三人の生活を始めている。

いさぎよく颯爽としていた健之介、聡明で優しくかったふさ、その教えを忠実に守った娘たち、この明治生まれの人々の思い出は、日本の古き良き時代の形見なのだと邦子は遠く信州を偲んで思うのである。